＜東北税理士会会長賞＞

誰かの『生きたい』を支える税

福島県立会津学鳳中学校　３年　髙木　里紗

私はこれまで、税金について深く考える機会があまりありませんでした。税金は私たちの生活に必要なものだと分かっていても、自分からは少し遠い存在のように感じていたからです。しかし、祖父の闘病生活を経験したことで、税金は私たちの暮らしだけでなく、誰かの命や未来を支えているものなのだと実感するようになりました。

私の祖父は、悪性リンパ腫という病気になりました。約５年間にわたる闘病生活の中で、入院しながら抗がん剤治療や放射線治療などを何クールも受けました。治療は身体的にも精神的にも大きな負担があったと思います。それでも祖父は、つらい治療に耐えながら前向きに頑張っていました。その姿を近くで見てきた私は、医療には病気を治療するだけでなく、「生きたい」と願う人を支える力があるのだと感じました。

また、長期にわたる治療では医療費も大きな負担になります。そのようなときに支えとなるのが、高額療養費制度です。高額療養費制度は、医療費の自己負担額が一定の上限を超えた場合、その超えた分が支給される制度です。祖父のように長期間にわたって治療を受ける人や、その家族にとって、このような制度があることは大きな安心につながります。私はこの制度について知ったとき、病気と闘う人を支えているのは、医師や看護師をはじめとした医療従事者だけではないのだと気付きました。

日本の公的医療保険制度は、保険料だけでなく税金などによ

っても支えられています。つまり、普段は目に見えない税金が、医療を受ける人を支える社会の仕組みの一部になっているのです。もし日本にこのような医療制度や社会保障の仕組みがなかったら、祖父は同じように治療を受け続けることができなかったかもしれません。そう考えると、税金は決して自分とは遠いものではなく、私たちや大切な人の命にもつながっているものだと感じます。

税金は医療だけでなく、学校、道路、消防、警察など、私たちが安心して生活するためのさまざまな場所で使われています。誰かが困ったときに社会全体を支えられるのは、多くの人が税金を納め、その仕組みを支えているからです。

祖父の闘病を経験したことで、私は今まで当たり前だと思っていた医療や社会の仕組みが、決して当たり前ではないことに気付きました。これからは税金を単に「払うもの」と考えるのではなく、誰かの安心や命、未来につながる大切なものとして考えていきたいです。